

目次

緯度殺人事件

5

訳者あとがき 279

解説 廣澤吉泰 282

Murder by Latitude  
1930  
by Rufus King

## 主要登場人物

- ソーム……………〈イースタン・ベイ号〉の船長  
ガンズ……………〈イースタン・ベイ号〉の無線通信士  
スウィザーズ……………〈イースタン・ベイ号〉の二等航海士  
マーガレット・シダビー……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客  
エラ・シダビー……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客。マーガレットの妹  
キャシー・プール……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客  
シオドア（テッド）・プール……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客。キャシーの夫  
アンナ・ウィックストッド……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客。キャシーのメイド  
ミスター・ステイックニー……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客  
ミスター・デュマルク……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客  
ミスター・フォース……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客  
ミスター・ライト……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客  
サンフォード夫妻……………〈イースタン・ベイ号〉の乗客  
ローレンス（ラリー）・レイン……………キャシーの最初の夫  
ヴァルクール……………ニューヨーク市警の警部補



北緯三二度五〇分、西経六四度四九分

無線係のミスター・ガンズが死んだ。死体は、疲れてのびてしまっているかのように、端艇甲板(救命ボートを設置した最上層の甲板)にあるソーム船長の居室のすぐそばで、大の字に倒れていた。いつも細くて頼りなかつた首に痣ができていた。誰かが喉笛を手で締め上げて、肺が機能しなくなるまで締め続けたのだ。心臓は鼓動を止めていた。きつと(華奢な体格から判断して)弱々しくあがいたはずだが力尽き、そしてミスター・ガンズは死んだのだ。

出航後最初の晩、姉のほうのミス・シダビーがミスター・ガンズの疲れてのびてしまっているような死体を偶然発見した瞬間までは、この航海はおおいに楽しいものになりそうに思っていたのだ。ふだんとは違う雰囲気か漂っていた。海という、未知の部分があまりにも多い場所を旅するにしても、ふだんとは違っていた。

もちろん、注目的はミセス・プールだった。シダビー姉妹の姉のほう(同行している妹はいつも「姉のマーガレット」と呼んでいた)は人の性格を見抜くことがとても得意なのだが、ミセス・プールの性格を見抜こうとする努力は、いまのところ完全に失敗していた。

そんなふうには、すべてがくだらない話だったのだ——つまり、ミセス・プールの件に関しては。彼

女の持つ衣装とか、所持する宝石とか、夫とか、メイドとか、そもそもこの船に乗ることになった経緯について情報がないこととか。安いちっほけな貨客船の乗客名簿で見かけるような家柄ではない——決してない——のに、名簿に載っていた。(イースタン・ベイ号)のバミューダからハリファクスに至る航路の間、ミセス・プールと高価な持ち物(その中で最も高価でなさそうに見えるのが夫君だった)の存在以外、なにもトラブルが起らなかったとしても、記憶に残る旅となったことだろう。実際は、航海は悲劇的な経過をたどり、未完に終わってしまったのだが。

どうやら、船がハミルトン(英領バミューダ諸島の首都)を出港したとき、ミセス・プールが乗り込むのを見た者は誰もいなかったらしい。夫の姿も、平べったい顔立ちで骨太の北欧系のメイドの姿も誰かに見られていたし、荷札の付いていない無地の高価な旅行鞆が数えきれないほど積み込まれるのも、確実に目撃されていた——なのに、ミセス・プールの姿だけは誰も見ていなかった。

ミス・シダビーは、涼しげなライラック色のリネンをまとった人影と、甲板のどこかですれ違ったことはかすかに覚えていた。クレーンの一基にトラブルが生じ、積荷の木箱が大きな音を立てて足場に落下して、船首のほうがしばらく騒がしかった間の出来事だ。ひよつとすると、あのとき……と言っても、実はそんなことはどうでもよかった。しかし、船の中という限られた空間ではささいなことも誇張されて、重大問題になってしまうものなのだ……。

昼食時になり、バミューダの陽光照りつける波止場も無遠慮に生い茂る草木も記憶の中にかすんで消えてしまい、清らかな海の歌が聞こえてくるころ、ミセス・プールがようやく登場した。

姉のほうのミス・シダビーは、なにかにつけて自分が年下だと強調したがる妹に負けじと、年上であることを利用してソーム船長の右隣の席に座った。マーカントイル・トランスポート・ライン社に

所屬するすべての船と同様に、小さな食堂には細長いテーブルがたった一つ置かれ、十二名分の席があり、この船の所有会社で働く数名の船長たちはホスト役の席に着くのが習慣だった。安価な移動手段として彼らの船を選んだ変わり者と親交を深めたいという個人的な願望があったわけではなく、会社からそうせよと命じられていたからだ。そうすれば日常とはちよっぴり違った雰囲気が生まれ、商売に役立つというのが会社側の主張だった。

ミス・シダビーはその取り決めに素晴らしいことだと考えていた。白のドリル地に真鍮のボタンの付いた制服を病的なまでに愛していて、その上に載っている顔も、それを着ている体も、どんなものでもかまわないほどだったのだ。彼女は喜び、満足していた。

一方、ソーム船長はそうではなかった。ミス・シダビーにいらいらしていたわけではない。山ほどいるミス・シダビーの同類には慣れていたし、もつと楽しいことをあれこれと考えながら、そういう連中をうまくあしらうこともできた——彼が呼ぶところの「暑苦しい取り決めすべて」にいらいらしていたのだ。船首のほうにある高級船員用の食堂で、上着を脱いで、もう一度（会社が船の余剰スペースを客室に改造する前の、幸福で自由だったあのころのように）ピクルスを好きだけ食べていたかった。そんなふうに使っていると思わず、びっくりしたミス・シダビーの同類たちが、その驚きを言葉で伝えてくる——「それって、船酔い防止に効くんですか？」

「あら、もちろん」——ミス・シダビー本人も、ちょうどその段階に至ったところだった——「ソーム船長がそれを召し上げるのは、つまりその、ラマルドメール船酔いを防ぐためですよ。あの小さい緑色のピクルス、もつと運んできてくれないものかしら」

そのとき、ミセス・プールが、いつの間にか食堂へ入っていた夫に続いて登場したのだ。白いドレ

スは、食堂のアイボリーの羽目板よりもはるかに白い。腕も顔も脚も（ストッキングは履いていない）赤銅色、髪と眉毛は白っぽいプロンドで、瞳には妙に満足げな表情が浮かんでいる。年齢は永遠の二十六歳だ。

ソーム船長は立ち上がった。実のところ、彼が起立したのは完璧な幻が頭に浮かんだせいには違いない——これが、ヘイル・ド・フランス号（フランスの有  
名な豪華客船）での昼食時の出来事だったなら……。だが実際は、少々むさ苦しくばつとしないヘイースタン・ベイ号……。船長は会釈をした。そして、左隣の席の椅子を引いた。ミセス・プールは腰を下ろした。ミスター・プールは、妻の隣の席が空いているのを見て、そこに座った。

ミス・シダビーは決して本気でうろたえることのない性格なので、最初に口を開いた。「さて、これで全員お揃いになりましたわね——とつても幸せな家族みたいに」彼女はすべて埋まった席を見回し、分け隔てなく微笑みかけた。

ミセス・プールが笑い声を上げたが、たちまち不穏な空気が漂ったのは、それに続く発言のせいだった。「あなた、家族についてよくご存じなの？」

「家族？ ミセス・プールでいらつしやいますよね？」（ミセス・プールは笑みを浮かべたまま、そのとおりだと認めつつ——ミス・シダビーの口調は非難がましく聞こえた——ナプキンを膝に置いた）「わたしはミス・シダビーで、こちらは」——身内の紹介くらいは済ませておいたほうがいいだろう——「妹ですの。このささやかなグループの全員をご紹介することはとても無理ですが、ほかの方々にはソーム船長が紹介してくださいさるでしょう。ええ、ソーム船長さんなら、きつとやってくたさるはずですわ」

そう言うのと、ミス・シダビーは湿気たクラッカーを添えただけの平凡なスープに意識を集中し、家族に関する不穏なコメント（不穏なのは、その言外の意味があまりにも明らかだったからだ）には返事をせず引き下がってしまったので、ソーム船長は、船舶会社のばかげた思いつきにも結局のところ一理あるのかもしれないと思いつきながら、妹のほうのミス・シダビーの右隣に座っている青白い顔の中年男を指し示した。

「ミスター・ステイックニーです」ソーム船長が言った。

ミスター・ステイックニーは、スープのカップに覆いかぶさるようにお辞儀をした。「お目にかかれて光栄です、ミセス・プール。本当に」

「サンフォード様ご夫妻です」ソーム船長が会釈をした先には、日焼けしすぎた肌の初老のカップルがいた。ミセス・サンフォードはなんの特徴もないフラール地の服を着ていて、甘ったるい雰囲気を感じさせていた。奥方ほどがっしりした体格ではない旦那のほうからは、カゲロウのようにどことなく透き通った印象がうかがわれた。

「ミスター・デュマルクです」

ミセス・プールは、すでにミスター・デュマルクに注目していた。この船で出会うだろうと予想していた乗客のタイプから、著しくかけ離れていたからだ。通路に立っていたとき、開け放たれた戸口から、甲板を歩く彼の姿を見かけたのだ。その踵の高い靴にすぐさま目を奪われた。履き口の浅い靴で——男性用パンプスとオックスフォード・シューズ（紐で締める紳士用短靴）の間ぐらいだ——踵がかなり細く、非常に高い。そんな靴を履くべき理由などなかったし（ミスター・デュマルクの身長は六フィート近くあった）、無地で灰色の柔らかな毛織りのニッカーボッカーの下からのぞく、ライル糸で編ん

だ上等な黒の長靴下についても同様だった。黒いホンブルグ帽をかぶった顔は、そんな奇抜な服装の説明がつかほど風変わりでもなければ、生気にあふれているわけでもない。「ミスター・フォースです——ミスター・ライトです……」

ミセス・プールの奇妙なまでに満足げなまなざしは、礼儀を失しない程度に無表情なミスター・デユマルクの目を離れて、ミスター・フォースの目に向けられた。ミスター・フォースは若かった。二十歳を過ぎてはたかどうかも疑わしい、と彼女は思った。どんな巡り合わせで、あるいはどういう目的で、これほど若くして航海に出ることになったのやら……。 「ミスター・ライト」。彼には、人目を引くところは皆無だった。肉付きの良い四十代の男で、額がいくらか出っ張り、小ぶりの鼻はてかてか光って……。彼女にとって、醜い人々は不愉快に思う対象ではなかった。ただ単に、そういう人々は存在していないだけなのだ。たとえ利口であっても。利口さなんて、世間が騒ぎ立てるにもほどがある。猫は利口だが、そんなことはどうだっていいし、利口な人々の大半は、心の奥にたくさんの猫を潜ませている——たいてい、醜ければ醜いほど利口で、利口であれば利口なほど猫っぽい——おそらく、作り方を間違えた造物主が、その埋め合わせとして……。

「さてお次は、ミセス・プール、われらが船の有名な人をご紹介しましょう」

ミセス・プールは、最後に残った人物に微笑みかけた。非常に和やかな気分で、たいそう満足していた。この物静かで、見苦しくなく、いくぶん年配の男の外見がかなり気に入ったのだ。男の灰色の瞳は、彼女の目を見て微笑んでいた。

「有名人ですって？」と彼女は訊き返した。

「ええ、ミセス・プール。こちらはニューヨーク市警のヴァルクール警部補です」

「まあ」彼女は水を少しこぼしただけで食い止め、グラスを注意深くテーブルの上に戻した。「本当ですか。わたしの自宅も、ニューヨークにあるんですよ、ミスター・ヴァルクール」

ヴァルクール警部補のお辞儀は、そつげなく儀礼的なものだった。それは奥方だけでなく、若きご夫君にも向けられていた。「ええ、ミセス・プール」と彼は言った。「存じております」